

# 実践女子大学蔵『今昔物語集』について

ここに公開する作品は、黒川家旧蔵にして、現在、実践女子大学図書館の所蔵になる二十六冊本『今昔物語集』である。本書は、一冊を一巻に当て、『今昔物語集』諸本が共通して欠く巻八・十八・二十一の三巻以外に巻二十三と巻三十一を欠くものの、巻一・二・三・四・五・六・七・九・十・十一・十二・十三・十四・十五・十六・十七・十九・二十・二十二・二十四・二十五・二十六・二十七・二十八・二十九・三十の二六巻が現存する。現存巻数に限って言うなら、国宝鈴鹿本（現在京都大学付属図書館蔵）を祖本に仰ぐ諸伝本中、古本系と称される重要伝本の中でも、国学院大学図書館蔵本と並んで最も多い。

本書の書誌については、夙に日本古典文学大系（岩波書店）や日本古典文学全集（小学館）『今昔物語集』に触れられているので、先学の驥尾に付しながら些かの知見を加えることにする。紙型は大型の冊子本で、江戸時代後期（もしくは末期）に竹紙を料紙に書写された。寸法は概ね縦二十九・四センチメートル、横十六・二センチメートルで、行数は次の三種に分かれる。

- 八行 卷十一・二十四・二十六 （計三卷）
- 九行 卷一・二・三・四・五・六・七・九・十・十二・十三・十四・十五・十六・十七・十九・二十・二十二・二十七 （計十九卷）
- 十一行 卷二十五・二十八・二十九・三十 （計四卷）

右の内、九行本の十九巻が古本系に属し、他は全て流布本となる。文体は、九行本が漢字を大書し片仮名を小書するいわゆる宣命体、他は通常の漢字片仮名交じり文体である。一行の字数は八行本が十七字なのに對し、十一行本は二十〇二十五字と振幅が大きい。巻二十九の如くに二十三字で一貫しようとする巻もあれば、巻二十五は二十四字前後で書き始めながら次第に字数を減じ、巻末は二十〇二十一字が一般となるように字配りが一定しない。九行本は宣命体の特質上字数を確定しにくいのが、漢字相当にして一行約二十字、仮名交じりでなら都合三十字程度になるうか。これも巻によって若干異なることは言うまでもない。書体は時に楷書体を交えながら、全体的には行書体とすべく、書体に関しては古本系と流布本系による有意差は認められない。

各巻とも表紙右上に「物語」の円印があり、左端に「今昔物語」（但し目録部においては「今昔物語集」と統一）、その下に巻を表す漢数字が墨書されている。目録の右下に「黒川真頼藏書」「黒川真道藏書」の長方形朱印と「黒川真頼」の円朱印が押ししてある。表紙に「昌平御庫本校合」「狩谷榎斎校合」「鈴木安覚本校合」とあり、本文中に朱でそれぞれ「東」「椴」「木」として校合した部分があるが、後になると、みな「イ」として校合を示すのみで、校合本はいずれも流布本という。

実践女子大学図書館蔵二十六冊本『今昔物語集』は、東京大学国語研究室蔵十五冊本『今昔物語集』（日本古典文学大系に言う東大甲本）と並んで、鈴鹿本に次ぐ善本である。既に鈴鹿本と東大甲本とが影印複製され或いは刊行中の現在、本書が全巻世に送られることによって、主要三本の比較対照が容易になり、今後の『今昔物語集』研究に極めて有益なること、信じて疑うものではない。